

2022年11月16日(第8回)
2022年度JLA中堅職員ステップアップ研修(Ⅰ)
領域2区分B①

レファレンスツールの評価

大阪府立中央図書館 門上光夫

はじめに

全体の見通し/講義の目的

- ・ 図書館の資料は膨大/利用者のニーズは多様
 - 図書館の資料: 全分野(0門-9門)/大人向けから子ども向けまで/過去からの蓄積幅が広い 膨大(1館で50冊の図書館なんてない)
 - 利用者のニーズ: 全分野(0門-9門)/大人から子どもまで/人それぞれ興味・関心・必要な情報は多様
 - 情報の精粗: 辞書の記述レベル・研究レベル・仕事に必要な情報・大人・子ども例) 小学校6年生が源頼朝
- ・ これを知ればすべて大丈夫、なんてレファレンスツールなどない
- ・ 利用者と利用者の必要とする情報を迅速にマッチングさせるためには…
 - 正確な情報を伝えられるレファレンスツールの評価が必要
 - 日々、経験し、研鑽を積んでいくもの
 - 評価の結果、備えられた図書館のレファレンスツールとレファレンスインタビューがマッチングに必要
- ・ 今日の講義の目的
 - 評価の対象となるレファレンスツールについて詳しく見ていく
 - 日常業務の実体験(予算/規模などの各図書館の実態)の中から、よい「レファレンスツール」とは何か、に「気づく」
 - 図書館でみんながレファレンスで工夫していることを引き出す
 - 全員のものにして、レファレンスツールを評価する力のアップにつなげる

「レファレンスツールの評価」(門上光夫)

I レファレンスツールの具体的内容と評価の目的

1 レファレンスツールとは

①レファレンスサービスについて

- ・「何らかの情報あるいは情報源を求めている利用者に対して、図書館員が利用のための手助けや、資料または情報提供をするサービスのことをいう。利用者の求めに応じて、当該図書館所蔵コレクションおよび公表されている情報源を典拠として、図書館員が直接行うサービスで、具体的には、利用案内・情報の提供、具体的な質問事項に対する調査・回答、情報源の提供、二次情報源の作成のようなサービスである。」

『図書館で使える情報源と情報サービス』(木本幸子/著 p.7)

- ・「情報サービス」というより大きな概念を使用
→レファレンスについて学ぶテキストも「情報サービス」という語を使用
→本日の講義は、核になる利用者が求める必要な資料や情報を入手するのを手助けする「レファレンスサービス」の部分

②レファレンスツールについて

- ・何らかの情報あるいは情報源を求めている利用者に対して、利用者自らが調査活動できる環境(パスファインダーの整備、配架)ができれば、よいが…、
 - ・例) 全分野(0門から9門) / 幅が広い 膨大
利用者のニーズ / 多様
情報レベルのちがいが
 - ・ i) どんなに資料をよく知っている利用者も調べるためのツールが必要
 - ・ ii) いわんや、図書館に慣れていない利用者をや→図書館員の手助けが必要
 - ・ iii) 図書館員にも調べるためのツールが必要

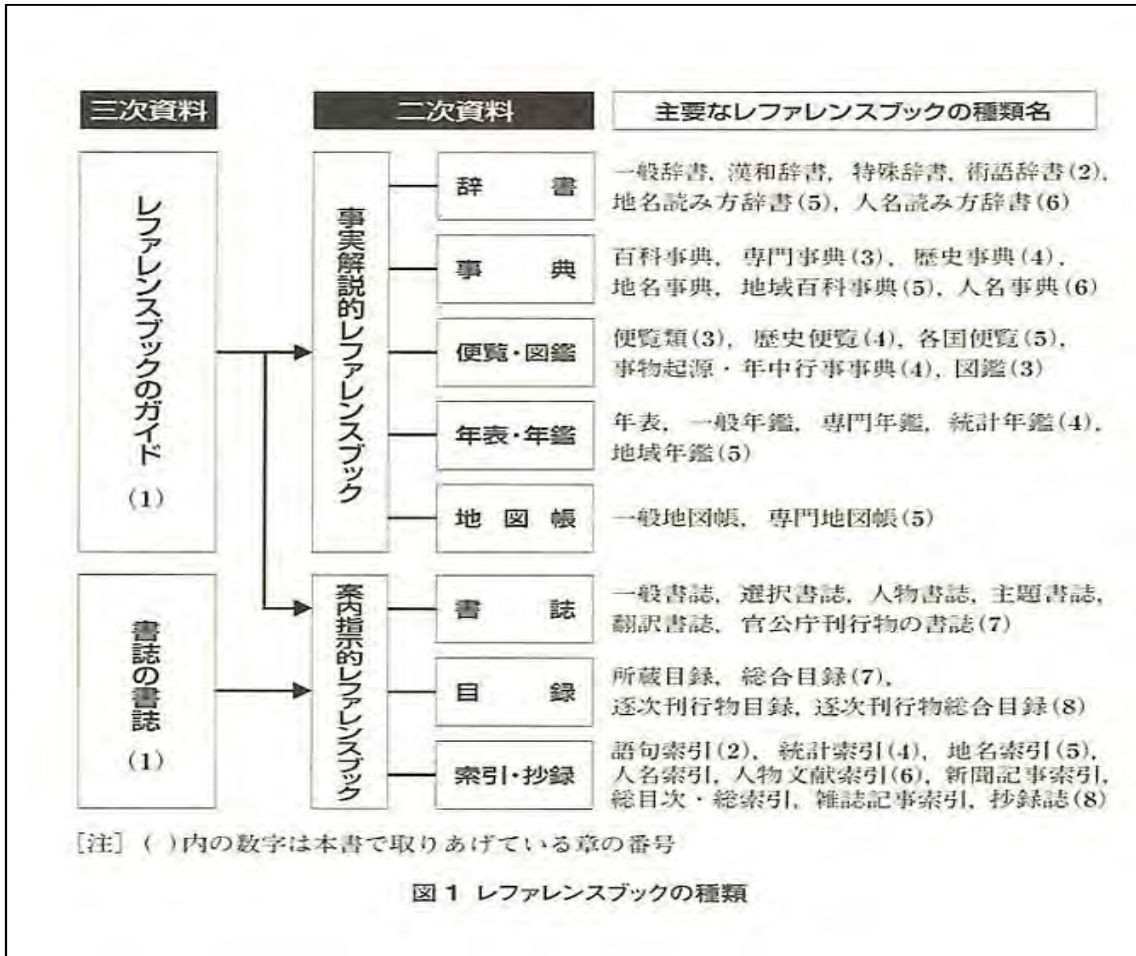
・レファレンスルーツ

- 膨大な図書館の資料や情報と多様な利用者のニーズを結びつけるツール(道具)
- 形態はレファレンスブック(参考図書)とインターネット情報

③レファレンスツールとしてのレファレンスブック(参考図書)

- ・既知の情報を整理して項目見出しのもとにまとめ、それを一定の順序(五十音順、年代順、その他の体系順)に配列することによって、特定の情報が容易に見つけ出せるように編集された知識の本
- ・一部を参照することを目的に編集された調べるための本

『情報源としてのレファレンスブック 新版』(長澤雅男/[ほか]著 P.4)



(長澤雅男・石黒祐子『情報源としてのレファレンスブック：新版』6頁より)

・事実解説的なレファレンスブック

→必要とする情報そのものを求めることができるもの。回答型ともいう

例) 辞書、百科事典、専門事典、便覧、図鑑、年表、年鑑、地図帳、地名事典、人名事典、名鑑

・案内指示的なレファレンスブック

→情報ないし情報源への案内を主なはたらきとしているもの。求めている情報の「場所」を教えてくれる

例) 書誌、目録、索引、抄録

④インターネット情報

・ウェブ上の情報源

→有料のオンラインデータベース

→一般公開されている一次情報

例) 観光庁、電子政府の総合窓口 (e-Gov)、政府統計の総合窓口(e-Stat)

「レファレンスツールの評価」(門上光夫)

→情報機関による情報

例) Wikipedia、CiNii Reserch

→一般のホームページ

例)「日本民営鉄道協会のサイト」:女性専用車両がいつ導入されたかわかる

⑤自館作成ツール

・発信型ともいう、二次情報源の作成

・既成のレファレンスツールで間に合わない場合に各館で必要に応じて作成したもの

例) 目録類やパスファインダー、FAQ、リンク集、レファレンス事例データベース

2 なぜレファレンスツールを評価しなければならないのか

・「適切なものを選んで、目的にかなった使い方をしなければならない。」

→レファレンスコレクションを構成するため、特定のレファレンスブックの選択・受入れのため、自館で所蔵するレファレンスブックとか新刊のレファレンスブックの情報の価値を理解するため、利用者にそれを紹介するため

『情報源としてのレファレンスブック 新版』(長澤雅男/[ほか]著 P.4)

・評価の必要性

→利用者ニーズと合うか

→予算の制約内か

→図書館のスペースに見合うか

→より大きな図書館に任せ、自館では購入を見合わせる方がよいか

「新たなものとして入手した方がいいのか、または、より大きな図書館に任せ、自館では購入を見合わせる方がよいか判断する。このときの目安は、その図書館の蔵書規模や予算に左右されるが、所蔵漏れのある分野や利用頻度が多いと思われる分野の資料は、一度現物を確認し判断する必要がある。」

『改訂 情報サービス演習(現代図書館情報学シリーズ7)』(原田智子/著 p.188)

II レファレンスツールの評価

I 受講者によるレファレンスツールの評価

◎日頃の業務でよく使うレファレンスブック(詳細は【参考資料I】)

順位	書名	出版者	得票数	支持率
1位	『角川日本地名大辞典』	角川書店	9票	36.0%
2位	「地元の自治体史誌」		5票	20.0%
	『世界大百科事典』	平凡社	5票	20.0%
	『日本国語大辞典』	小学館	5票	20.0%
3位	『総合百科事典ポプラディア』	ポプラ社	4票	16.0%

(25名 全票数63票)

「レファレンスツールの評価」(門上光夫)

◎日頃の業務でよく使うインターネットサイト (詳細は【参考資料2】)

順位	書名	出版者	得票数	支持率
1位	国立国会図書館ホームページ レファレンス協同データベース リサーチナビ サーチ オンライン デジタルコレクション 国際子ども図書館 国立国会図書館	http://www.ndl.go.jp/	31票 14票 7票 4票 3票 1票 1票 1票	124.0%
2位	絵本ナビ	https://www.ehonnavi.net/	5票	20.0%
3位	国立情報学研究所 CiNii Research CiNii	http://www.nii.ac.jp/	4票 3票 1票	16.0%
4位	楽譜ネット	https://www.gakufu.ne.jp/	3票	12.0%

(25名 全票数71票)

◎「理由」の使用語彙の分析から

名詞			動詞			形容詞		
	単語	出現回数		単語	出現回数		単語	出現回数
1	資料	49	1	できる	77	1	多い	47
2	検索	45	2	調べる	36	2	よい	7
3	レファレンス	39	3	探す	30	3	詳しい	6
4	確認	30	4	知る	24	4	幅広い	5
5	使用	29	5	受ける	18	5	古い	4
6	本	29	6	わかる	18	6	良い	4
7	情報	26	7	使う	15	7	しやすい	3
8	質問	24	8	おる	11	8	細かい	3
9	掲載	20	9	載る	10	9	高い	3
10	調査	20	10	読む	9	10	探しやすい	2
11	場合	20	11	引く	8	11	少ない	2
12	利用者	19	12	見る	8	12	大きい	2
13	絵本	19	13	分かる	7	13	ほしい	2
14	便利	19	14	得る	6	14	早い	2
15	参考	18	15	行う	6	15	手渡ししやすい	1
16	利用	17	16	聞く	6	16	広げやすい	1
17	所蔵	16	17	役立つ	5	17	つながりやすい	1
18	キーワード	16	18	あたる	4	18	分かりやすい	1
19	図書館	16	19	開く	4	19	使いやすい	1
20	地名	15	20	使える	4	20	わかりやすい	1

- ・今日の受講者にとって、よいレファレンスツールとは、
→詳細な説明が記載されていること、次の情報へ繋ぐことができること、何らかの手がかりが得られること、項目の多いこと
- ・「網羅的で情報量の豊富なレファレンスツール」が選ばれている

「レファレンスツールの評価」(門上光夫)

○<参考>図書館員が選んだレファレンスツール 2015

第17回図書館総合展 日外アソシエーツ主催フォーラム(大串夏身先生)企画

・レファレンスブック https://www.nichigai.co.jp/cgi-bin/ref2015_result.cgi#2

順位	書名	出版者	コメント
1位	『国史大辞典』	吉川弘文館	日本史関連では必須の辞典。参考文献が載っていてよい。
2位	『角川日本地名大辞典』	角川書店	旧名や小さな事項もとりあげがあり、他に郷土の調べものの取っかかりが探せるので重宝している。
3位	『日本国語大辞典』	小学館	調査の系口。
4位	『理科年表』	丸善出版	こまごまとよく使う。理系はジャンルが細かいので、どれか1冊といったら、これかなあ、という感じ
5位	『世界大百科事典』	平凡社	そのことがら(物)について基本的なことをまず確かめることができる点。
	『大漢和辞典』	大修館書店	漢字の読み、意味、解説はもちろん、漢文訳やその出店、漢詩人名の読み・時代や漢文収録資料が掲載されている。索引も豊富でいろんな引き方ができる。
7位	『日本大百科全書』	小学館	あらゆる分野について調べられる。カラー図版も多く、参考文献も掲載されている。
8位	『国書総目録』	岩波書店	データベースが発達したとは言え、古典籍を探そうでの、基本となる資料。古典籍のヨミを調べる場合でも、役立つ。
9位	『現代用語の基礎知識』	自由国民社	基本的なことを調べる際に役立つ。レファレンスのヒントを探すのに良い。
	『広辞苑』	岩波書店	お客さまのレファレンスを受けた際、まずこの本で探してから、さらに細分化させていながら調べることが多いので、この本を推しました。

・インターネットサイト https://www.nichigai.co.jp/cgi-bin/ref2015_result.cgi#2

順位	書名	出版者	コメント
1位	CiNii Articles	国立情報学研究所	CiNii Articlesは、日本語の論文検索を行う際に必ず使っている。本学OPAC、各機関のリポジトリ等へリンクが貼られている点が便利。
2位	CiNii Books	国立情報学研究所	公共図書館には所蔵が無い場合の確認にしようとしています。国会図書館サーチとならんで、とりあえず何でも検索できる。
3位	ジャパンナレッジ Lib	ネットアドバンス	『大日本百科全書』をはじめとした様々な辞書が搭載されており、言葉や人名などを手軽に検索できる便利なツールです。『会社四季報』・『エコノミスト』といった就職活動にも有用なコンテンツがあり、学生にすすめています。
4位	NDL-OPAC	国立国会図書館	CiNiiでは検索しきれない資料や、NDLのみが所蔵している資料を検索することができるから。図書館間相互利用の際に利用することが多い。
5位	国立国会図書館デジタルコレクション	国立国会図書館	インターネット上で画像まで閲覧可能なものもあり、閲覧不可であっても詳細な目次情報まで確認できる。今年度送信サービスに加入したことで、館内で閲覧できる資料も増えた。
6位	日経テレコン	日本経済新聞デジタルメディア	過去30年分の新聞・雑誌を中心に、国内外の企業データベースや人物プロフィールなど、幅広いビジネス情報を集録。
7位	聞蔵II	朝日新聞社	1879年の創刊時から朝日新聞の記事検索ができるため、時事問題の資料集めの他に、近現代史資料のデータベースとしても多くの学生に使用されています。
8位	ウィキペディア	ウィキメディア財団	google検索すると必ず上位に出てくるので、とりあえず基礎情報を得るのに便利。ただし、内容を100%信用できないので利用者にはよほどのことがないとそのまま案内しない。
9位	国立国会図書館サーチ	国立国会図書館	NDL・都道府県立図書館・政令指定都市の図書館の資料を一括で検索でき、検索語の絞り込みなども行いやすく便利。
10位	DI-Law.com	第一法規	現行法令に加えて改正履歴や判例について調べられる。リンクが充実しており使いやすい。

「レファレンスツールの評価」(門上光夫)

2 レファレンスツールの評価の要点

①レファレンスブック

・『情報源としてのレファレンスブックス 新版』(長澤雅男/[ほか]著 P.6-25)

・製作にかかわる要素：情報が正確で信頼できる

- ・編著者：専門的な知識を有する事物や団体
- ・出版者：特定主題を専門資料に実績があり、評価されている
- ・出版年：情報の内容の新鮮度。いつの時代の知見かの明確化

・内容にかかわる要素

- ・範囲の設定：どこまで記載されているか
- ・扱いかた：均等/重点 専門知識が必要/不要
- ・項目の選定：大項目主義/小項目主義
- ・排列方法：見出し語の配列方法
- ・検索手段：検索語の種類と語数の確認
- ・収録情報の信憑性：正確なもの 項目執筆者の署名、出典の明記。内容の精粗

・形態に関わる要素：

- ・印刷：見出し語と本文のフォントの違い、鮮明さ、文字下げ
- ・挿図類：必要な写真が入っているか、内容の助けになるか
- ・造本：堅牢、背文字の鮮明さ

②インターネットサイト

・『講座・図書館情報学 8 情報サービス演習』(中山愛理/編著 p.23-24)

・提供に関わる要素

- ・制作、提供者、価格：誰が作成したか。いくらか

・内容に関わる要素：

- ・範囲の設定：どこまで記載されているか
- ・管理、更新頻度、信憑性：いつの情報か

・操作性に関わる要素：

- ・検索、表示、利便性
- ・動作環境：下手すると閲覧できない

「レファレンスツールの評価」(門上光夫)

Ⅲ 意外と使えるレファレンスツール

・意外な時に使えた参考図書(詳細は【参考資料3】)

・意外な時に使えたインターネットサイト(詳細は【参考資料4】)

おわりに

1. 評価の対象となるレファレンスツールについて詳しく見ていく
2. 日常業務の実体験の中から、よい「レファレンスツール」とは何か、に「気づく」
3. 図書館でみんながレファレンスで工夫していることを引き出す
4. 全員のものにして、レファレンスツールを評価する力のアップにつなげる